

旅の幻燈

五木寛之



旅の幻燈

五木寛之

講談社

旅の幻燈

昭和61年7月18日 第1刷発行

著者——五木寛之

©Hiroyuki Iwasaki 1986 Printed in Japan

発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—九五—二二三

印刷所——図書印刷株式会社

製本所——大製株式会社

定価——一一〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えます。

ISBN4-06-13080-4(0) (文11)

旅の幻燈 目次

記憶への旅

5

青桐の庭で

38

悪い仲間

60

プールサイドで

99

村の生活

111

白線の中

134

山麓の家へ

144

列車の中で

190

新しい生活

220

旅のはじまり

245

装
幀

松
永

真

旅の幻燈

記憶への旅

〈性に眼覚める頃〉という小説がある。室生犀星^{むろうさいせい}の作品である。ヘキタ・セクスアリス^{セクスアリス}という小説もある。森鷗外^{もりおうがい}の自伝的な作品だ。

両方とも、昔たしかに読んだはずなのに、くわしい筋も、描写も、すっかり忘れてしまった。部分が、きれぎれに残っているだけである。

忘れる、といえ、以前に読んだはずの小説の内容を、私はほとんど憶^{おぼ}えていない。主人公の名前はもちろん、物語の筋がどこでどうなったのかすらはつきりしない。何度となく、くり返し読んだ作品でもそうなのだ。

「記憶力と思考力は反比例するという説もある」

と、いちどある心理学者がなぐさめてくれたことがある。で、私はたずねた。

「すると、物憶えのいい奴は、思考力に欠けるといふわけか」

「そういうことになるな」

「じゃあ、ぼくは思考力にすぐれているタイプなんだろうか」

「年を取って記憶力がにぶるのは、またべつの問題さ」

弁解するわけではないが、私は昔から物を憶えることが苦手だった。最近になって突然、物忘れがひどくなったわけではない。虚心にふり返ってみても、そうである。

たとえば、小学校の頃の先生の名前をほとんど忘れてしまっている。これはどう考えても尋常ではない。

一九四五年、敗戦の夏、私は朝鮮の平壤にいた。今のピョンヤンである。そこで中学一年生として八月十五日をむかえた。だが、その中学の頃の教師の名前さえ、まったく忘れ果てている。

人の名前だけではない。幼い頃からのいろんな出来事も、光源のよわい幻燈のようにぼんやりと、遠くにかすんでいるだけだ。

これには何か隠された理由がありそうな気がする。ひょっとすると、思い出したくないようなことが、あまりにも沢山あって、そのために周辺の部分もぼやけてしまっているのではあるまいか。

私と同世代の作家たちの中には、おどろくほど記憶力のいい人物がいる。野坂昭如が、神戸の空襲のことを書いたり、後藤明生が朝鮮のことを書いたりするのを読むたびに、私はひどい劣等感をねばえずにはいられない。なんだか自分の過去に、申し訳ないような気さえしてくるのだ。

そんな異常なまでに物忘れのひどい私にも、いくぶんましな記憶の引出しがあって、それはつまり、性に関するいくつかの場面である。その端っこをたぐりよせれば、何かが物陰から不意にぬつと現れ出てくるのかもしれないという気がする。

と、いうわけで、ひとつ頭にかぶままに、自分の幼い頃から、ある地点までの、性に関する記憶

を、未整理のまま書きつらねてみようと思うのだ。勿論これは、普通にいうところの小説ではない。だが単なる自伝ともちがう。

さきにあげた〈人性に眼覚める頃〉や、〈キタ・セクスアリス〉は、小説ということになっている。

私の考えるところでは、小説というのは、つくり話のことである。しかし、小説でない文章、自伝や随筆などがはたして事実を正確に伝えているかといえ、どうもそうとは思えない。

文章を書くということは、おのずから構成や選択に心をくぼる仕事だ。これを書き、あれをはぶくというだけでも、それは一つの構成的な作業である。本当のことだけを慎重に選んで構成すること、まったく正反対の読後感をあたえることは、それほど難しいことではない。

もっと意地悪なことを言えば、私たちの記憶そのものが、ある創作的な心の働きによって組立てられているのではないか。これは憶えておこう、これは忘れよう、と、無意識の選択が見えない場所で行なわれているはずだ。

したがって、私は自分の記憶が必ずしも事実だとは思っていない。ましてや私自身、小説家として世渡りしている人間である。自分の記憶をいつの間にか再構成してしまっているくらいでなければ、職業作家として生きてはいけないだろう。

私は敗戦の翌々年に、九州へ引揚げてきた。そのへんのことを、以前はよく喋った。インタビューを受けたら、対談の席でたずねられたり、いろんな場所で引揚げの話をした。

だが、一年一年と、そのことを喋ったり、書いたりすることが気が重くなってくるのを感じる。つまり、話ができあがってきてしまうのだ。起承転結というか、首尾一貫というか、筋がうまく進み、メリハリがちゃんとついてくるようになってしまった。何度も喋っているうちに、自然とそうな

ってくるのである。他人の体験をいつの間にか自分のことのように喋ったり、そのうちに自分の体験と錯覚してしまったり、無駄な部分をカットしたり、記録で調べて知ったデータを挿入そうにゅうしてみたり、要するにいつの間にかで、過ぎたお話に変わってくる。それが気持ちかわるい。

私は最初それを小説を書く人間だけの特性かと思っていた。ところが、そうではないことが次第にわかってきた。

私はかなり以前から、外地からの引揚者と会って、その体験談を録音テープに記録させてもらっている。これは冗談だが、いずれへ引揚げの記録ライブラリーみたいなものを作るつもりです、などと人には言っている。

この、人に会って話をきく、という仕事をくり返しているうちに、引揚者の体験談には、あるパターンがあることを発見した。また、ひとつの基本的なエピソードがあって、そのヴァリエーションとか、応用篇がしばしば登場してくることに気づいた。そのへんがおもしろい。

敗戦後、外地から引揚げてきた人に会って、話をきく。

どんな話でも、おもしろい。おもしろいというのは叱られそうだ。大半が考えられないような悲惨な事実ばかりだからである。

しかし、思わず聞いていてふき出しそうになるようなエピソードもある。悲惨さきわまって、泣き笑いに転ずるような例も少なくない。

そんな中で、しばしば全く同じ形式の物語に出くわすことがある。私自身の体験からいって、それは恐らくその人が実際に体験した出来事ではなく、伝聞でんわがいつの間にか事実として記憶の底に定着してしまったものだろうと思われる例が多い。

もちろん、語る側は自分が作り、ばなしをしているなどとは考えていないだろう。ただ、三十年という年月が、いつの間にか記憶を再構成してしまっているだけだ。

私はそれを批判しているわけではない。その反対である。そんなふうに、他人の体験が自己の記憶とごっちゃになり、エピソードが口から口へ伝わる間に脚色されふくらんでゆく、そこに伝承とか、民話とかの受胎の瞬間を見るような思いがあるからだ。

月並みな人情話に風化してゆくものもある。また、それと反対に、いっそう力強く、悲劇的な感動をよびおこす物語に昇華してゆくものもある。

そこでは人びとがそれぞれ作家なのだ。一種の集団創作の目に見えぬ働きが、そこでは演じられている。

それがおもしろい。だが、自分をも含めて、喋る側になってみると、すこしずつ気が重くなってくるものがある。そして次第に口数がすくなくなっていく。

私は何を言おうとしているのだろうか。

そうだ、要するに自分の記憶をそのまま信じていることができないわけを語っているのだった。私には語られたもの、書かれたものはすべて皆つくり話だという固定観念があり、それがペンの動きをさまたげるのだ。

私は自分の記憶を、時にふかい闇の淵のように感ずることがある。その底へ手をさしこむと、ぬめぬめと冷たい皮膚をもった蛇が、いきなり指にからみついてきそうな気がする。

記憶の底に、青白いアカシアの花房がかすかに揺れているのが見える。その花芯は、口にくわえると、ひんやりと涼しく甘い味がする。そこには、なにがしか性の匂いが漂っている。

かりに、私が二十歳の夏、池袋のマーケット街ではじめて女と寝た夜を記憶の旅の終着駅としてみよう。そこまでにいたる年月が、私の目の前にどたりとよこたわっている。その軟体動物のような、とらえがたい空間を、私は手さぐりで渡ってゆく。なにが出てくるかは、ためしてみなければわからない。だが、怖いもの見たさの気持ちもあって、私はいま、その暗い場所へおずおずと降りて行こうとしている。不確かな記憶の切れはしの浮遊している深い夜の海面のような場所へ。

いったい人間はいつ頃から性を意識するものだろうか？

そもそも人の記憶というやつは、何歳ぐらいまでさかのぼって思い返すことができるのだろう。

「トルストイは——」

と、昔、大学の教室でKという作家志望の仲間が、自分のことのように得意気に語るのを聞いたことがある。ロシア語の初級のクラスで、窓の外には初夏の空がはめ絵のようにくっきり見えていた日の午後だ。

「彼は産まれる時に自分をとりあげてくれた産婆の顔をおぼえていたそうだ」

「嘘だろう。そんなことはありえないな」

と、もう一人の学生が言った。

「本当だ。彼がちゃんと書いている」

「何という文章の中にかね。きみは自分でそれを読んだのか」

「いや、はっきりはおぼえていないが、トルストイはたしかにそう書いている」

「しかし——」

ロシア語の教師が姿を見せるまで、作家志望の学生と、評論家志望の学生との議論がどこまでも平行線をたどるのを横で聞きながら、私はぼんやりとほかのことを考えていた。

へところで、自分はいったい、何歳ぐらいまで自分の記憶をさかのぼることができるのだろうか？ 私は真剣に考えつづけた。だが、はっきりしなかった。私の頭の中にうかびあがってくる最初の記憶は、そう古いものではない。たぶん、四歳か、五歳ぐらいの頃のものだろう。

話は突然かわるが、数年前に、モハメッド・アリと対談をしたことがあった。ご存じ、世界ヘビー級のチャンピオンだった伝説的なボクサー、かつてのカシアス・クレイ氏である。

麻布のレストランの二階の、静かな部屋で私はこの端正な横顔の黒人拳闘選手と食事をした。

アリについては、いろんな噂が流れていた。彼が来日以来、いかに精力的に女と遊んだかという噂や、その尊大な態度、そしてほら吹き男というイメージを私は新聞、雑誌などからいやというほど吹きこまれていた。

私は筋骨たくましい、あぶらぎった大男を想像していた。だが、会ってみると、全然ちがうタイプの人物だったので、びっくりした。

彼はきわめて物静かな青年だった。私がなにかたずねるたびに、顔を前につきだすようにして真剣な目つきでこちらの目をのぞきこむのである。

何を食べますか、とたずねられたとき、彼は、お目付け役らしいマネージャーのほうをちらとうかがいながら、

「白身の魚を少し」

と、ウェイターに言った。そして運ばれてきた舌ビラメの身を、少しずつ、ごく少しずつ皿の上で

丹念に指でむしって、フォークを使わずで口へはこんだ。まっ黒な指につままれる魚の白い身が、とてもきれいだっただ。

「ブライベートな質問ですが——」

と、私は言った。

「なんです？」

彼は一瞬、魚の身をむしるのをやめて、神経質そうな表情で私をみつめた。

「ボクサーにとって、女はどういう存在ですか。大きな試合の前には女を遠ざけるといふ人もいるし、また逆にリラックスするためには、それが必要だという選手もいますか」

モハメッド・アリは、私の質問の遠回しの意味をすぐに読みとって、何か言おうとした。だが、一瞬、彼は口ごもると、突然、しかつめらしい顔にもどって演説をはじめた。

私は自分のワイフを愛している。彼女は立派な女性である。私の今日あるのは、ワイフの協力のたまものである。それに——。

「もっとちがった意味の質問なんです」

と、私は言った。彼は骨だけになったヒラメを、そっと皿の上にもどしてうなずいた。

「私は女性はミニスカートをはくべきではないと思います」

と、モハメッド・アリは、私の顔をまっすぐみつけて言った。彼の目は、彼の喋っていることと別な暗号を私のほうに送っていた。おわかりでしょう？ 今のぼくにどんな話題が公開を許されるか、どんな話題についてはジャーナリズムの前で喋りたくないか、あなたはこちらの立場を当然わかっていてくださるはずだ、ぼくはここでは公式的な発言しか出来ないのですよ。

それは私にも納得のいくことだった。そこで私は彼がひどく道徳的な女性論を一席ぶち終えた後で、こんどは別な質問をすることにした。私はたずねた。

「ミスター・アリ、あなたの記憶の最初の場面について話してください」

「最初の記憶？ 私の？」

彼はあっけにとられたように私を眺めた。そして、それまでの応答とは全くちがう口調で、独りごとのようにしきりに何かつぶやきはじめた。

「さあ。なんだろう。最初の記憶か。うん、そうだ、あれかな？ いやちがう、ちがう。それはたぶん——」

彼の困惑ぶりが余り大袈裟なので、私は思わず笑ってしまった。彼はおざなりな答ではなくて、本当のところを喋ろうと額に汗をかかんばかりの表情で考えはじめていたのである。

「なんでもいいんです」

と、私は言った。彼の気を軽くしてやろうと思ったのだ。

「いや、そうはいかない。うーん、最初の記憶という——」

突然、彼は両手をボンと叩いて、そうだ、と短く叫んだ。

「あれは何歳ぐらいの時のことだっただろう。引越した。引越しをして、どこかへ移った。あたらしい家だ。私がそこへまっすぐはいって行くと、母親がいた。それから私はすたすた部屋を横切って庭へ出たんだったっけ。庭、そう、庭だ。そこにリンゴの木が一本うわっていた。私がそのことを母に報告すると、母がなにか言ったんだ」

モハメッド・アリの目の奥に、一種の歎びに似た色がうかんだ。彼は皿の上でヒラメの骨を一つづ

つばらばらにしながらうなずいた。

「そう。あれが、たぶん、五歳か、六歳の頃のことだと思う」

「あなたの母親は、そのとき子供のあなたに何と言ったんです？」

「うーん」

彼は考えこんだ。そして呟くように言った。

「よくおぼえていないですね。しかし、私は子供心に、なにか妙にセクシュアルな印象をうけたことを記憶しています」

私は彼に礼を言い、その対談を終りにした。帰りぎわに、モハメッド・アリは、こんな質問をされたのはじめてで、と、二度くり返して言った。

「この次にお会いしたときには、あんたが最初に記憶してることをうかがいますよ」

彼は如才なく私にそう挨拶すると、握手をして部屋を出て行った。

へい奴だな、あの男は」

と、私は思った。彼が夜毎日毎どんなに盛大に遊ぼうと、それはこちらには関係ない。彼は女性に關しては、宗教上のきわめて厳格なモラルを持っていた。一つの主義としてではあるが。

人の信念と行動とは、食いちがうことのほうが自然だし、そのほうが正しい、と私は思う。言行一致というのは、しばしば想像力の単なる欠如を示すだけに過ぎない場合もある。

私はモハメッド・アリと別れた晩、夜おそくまで酒をのみながら、自分のことについて考えた。

へおれの最初の記憶ははたして何だろうか？

その答は、今もってはつきりしない。いつも何場面かのイメージが重なって現われ、それを時間の